麗澤大学紀要 第91巻 2010年12月

政治を演じる：イギリス女性参政権運動における女優参政権同盟の役割

佐 藤 繭 香

１．はじめに

1908年12月、ロンドンのピカデリー・サーカスにあるクライテリオン・レストランに集まった演劇関係者によって、女優参政権同盟(Actresses' Franchise League、以下 AFL)が誕生した。会長となったのは、有名なシェイクスピア俳優ジョンストン・フォーブス・ロバートソンの妻であり、自身も女優であったガートルード・エリオットである。

イギリスの女性参政権組織は、エメリン・パンクハースト夫人率いる戦闘的な手段を使用することで悪名高かった女性社会政治同盟（Women's Social and Political Union、以下 WSPU)、ミリセント・ガレット・フォーセット夫人率いる穏健派の女性参政権協会全国同盟（National Union of Women's Suffrage Societies、以下 NUWSS)、そして、WSPU から活動方針の違いにより分離した女性自由連盟（Women's Freedom League、以下 WFL）の三大組織のほか、多数の組織が存在した。支持する政党、信仰する宗教、また自分自身の職業などによって区分された組織が存在し、AFL には、女優や音楽家など演劇界

に携わる職業についたものたちが集まった。[1] ガートルード・エリオットだけでなく、オスカー・ワイルドが「ライシーアムのレディ」と呼んだ大女優エレン・テリーをはじめとする有名女優たちが名を連ねたこの組織は、女性参政権運動における広報活動において大きな役割を果たした。

AFLに関する研究は、海外では、ホーリッジやストーウェルの研究に始まり、カールソンらが演劇界における女性劇作家の活躍やエドワード朝期の演劇界における参政権運動に関連する劇の位置づけを再考している。[2] 日本では、山本が、AFL の演劇作品を紹介し、女性劇作家の増加における AFL の役割について論じた。[3] こうした研究の多くは、AFL の劇作品の分析等に焦点があてられている。しかし、本稿では、AFL という組織そのものに注目したい。AFL は、有名女優を使い、女性参政権の広報活動に貢献したが、本稿では、数多くの組織が存在した女性参政権運動において、戦闘派と穏健派の組織がある一定の類似した広報活動を提供することができたのは、AFL の役割が大きかったことをとりあげる。さらに、その類似した広報活動とはいかなるものだったのかについて考察する。

２．ＡＦＬの活動

1913 年に出版された『参政権年鑑と女性人名録』の「女優参政権同盟」の項目には、AFLの活動目的として、次の三つが記載されている。

(1)．演劇の職についている人々に、参政権を女性にまで拡大することの必要性を確信させること

(2)．教育的な方法によって女性の参政権獲得のために尽力すること

(3)．可能な限り他の全ての組織を援助すること[4]

これらの目的のとおり、AFL は、ライシーアム劇場といったロンドンのウェストエンドにある大劇場におけるロンドン公演だけでなく、公共のホールや個人宅などにおける劇の提供、NUWSS や WSPU に要請され芝居を提供した。「教育的な方法」とあるが、それは AFL にとって、演劇を提供することであ

った。

ロンドンにあるウィメンズ・ライブラリーには、AFLの1908年から1914年の年次報告がおさめられている。その記録によると、年に一度のクライテリオン・レストランでの年次集会のほかに、NUWSS、WSPU、WFLなどの地方支部組織からの依頼による演劇の提供、年に一回のウェストエンドの劇場での公演、さらに1910年からはイーストエンドのボウとポプラーで会合、その他の集会が主な活動内容であった。

AFLは、その組織の内部にアイネス・ベンスーザンを責任者として演劇部（Play Department）を設立し、NUWSS、WSPU、WFL等の組織の依頼によって、演劇を提供した。1913年から1914年の年次報告によると、この年の47の余興を執り行ったという。[5] 演劇部 を設立し積極的に演劇を提供するほど、演劇を「教育」の有効な方法としてみなしていたと考えることができる。

このAFLの演劇部の活動を後押しする当時のイギリスにおける演劇の有用性に関する議論はどのようなものだったのだろうか。歴史家ラファエル・サミュエルは、19世紀後半における社会主義は、芸術を大衆に教育と啓蒙をもたらすものとみなしたが、演劇は、専門職階級、とくに芸術に傾倒していた一部のブルジョワ階級を対象としており、左翼演劇は政治に関与していたというよりは、社会を意識したものであったという。[6]

当時、影響力のあった芸術論に、レフ・トルストイによる『芸術とは何か』（1898）がある。彼は、「芸術はある人が他の人と同じ感情のもとに結びついたり、あるいは他の人を自己自身と結びつけたりする目的をもって、この感受を外的な記号を通して表出するときにはじまるのである」と述べ、さらに、「芸術作品が良い芸術作品であるとき、芸術家によって表出された感情は、それが道徳的なものであれ、不道徳なものであれ、他の人々に感染し他の人々に影響を及ぼす。…影響力が強ければ強いほど、芸術は芸術としてますます良くなる」と続けた。[7] トルストイの考えのなかに、芸術にプロパガンダとしての有用性があるという議論とつながる芽をみることができるだろう。

AFL の活動には、フェビアン社会主義者[8]で左翼演劇の代表ともいえるジ

ョージ・バーナード・ショーも少なからず関与していたわけであるが[9]、ショーは『イプセン主義の真髄』のなかで、ヘンリク・イプセンの演劇が、「今の理想には一致しない振る舞い」をあらわしていると述べ、人間の振る舞いはその時代の理想に縛られるべきものではないと主張した。[10]『イプセン主義の真髄』でイプセンの演劇が単なる非道徳的な演劇であるとみなされないよう解説を行うショーは、演劇の教育的効果を期待していたといえよう。

しかし、芸術にプロパガンダとしての有用性があるかについては、当時の社会ではまだ一般的な考えではなかった。1908 年7月 18 日、ギルド社会主義に傾倒する A. P. オレージが編集していた雑誌『ニュー・エイジ』に「芸術とプロパガンダ」という投稿が掲載されている。『ニュー・エイジ』に投稿したアンソニー・オールドペイトは、ショーの演劇をプロパガンダと考えることについて「愉快さの爆発」が抑えられないと述べた。[11] その投稿から約十週にわたり、読者との間で、ショーの演劇をプロパガンダとして捉えるか否かについて議論が交わされた。ある読者は、芸術を徳のひとつとして捉え、何らかの思想を含むとする一方で、論争を始めたオールドペイトは、「ドラマは、実際、哲学を教えるのに適した媒体ではない。それは、これまでそのように使用されたことがないからというわけではなく、ただ単純にそのように使用されることはできないからである」と演劇をプロパガンダとして使用する可能性すら否定した。[12] また演劇の教育的要素を認めつつもプロパガンダとして使用することは認められないとする投稿者もいた。この読者の間での意見の違いをみてみると、AFL が誕生した 1908 年の時点で、演劇をプロパガンダとして使用することは、広く一般的な考えではなかったことが伺える。

そんな時代に、AFL は、「教育的な方法」として演劇を用い、そして 1910 年には『われわれの舞台とその批評家たち』を出版した批評家 E. F. スペンスが、「改革をもとめる手段として舞台の有用性の真価を認めたのは、男性というよりも女性の劇作家たちであった」と述べるまでになっていた。[13]

もちろん、これは、ショーなどの新しい演劇を模索した人々の影響が大きい。19 世紀後半から 20 世紀始めにかけて、演劇界では新しい動きが起こっ

ていた。当時、流行していたメロドラマ的な演劇ではなく、ヘンリク・イプセンの『人形の家』のようなリアリズムを提示する新たな演劇が登場した。「ニュー・ドラマ」と呼ばれた新しい演劇は、階級間の不平等、階級問題、女性の問題、労働者の権利といった社会問題を取り上げた。[14] 芝居の検閲制度に反発し、商業主義を批判したヘンリー・グレンヴィル・バーカーとヴェドレンヌによるコート劇場がその新しい演劇の舞台となり、女性参政権運動を取り上げた初の舞台として有名なエリザベス・ロビンズによる『選挙権を女性に！』はここで上演された。AFLのメンバーは、こうした「ニュー・ドラマ」に関わった人々のネットワークとも重なっていた。何よりも劇作家であったバーナード・ショーの演劇に出演する女優たちがAFLのメンバーとなっており、バーナード・ショーの妻もそうであった。[15] さらには、夫が演劇関係者である場合もある。たとえば、女優リラ・マッカシーは、ヘンリー・グレンヴィル・バーカーと結婚し、シビル・ソーンダイクは、のちにフェビアン社会主義者で俳優のルイス・カッソンと結婚した。シビル・ソーンダイクは、はっきりと参政権運動に関わったのは、社会主義者であったルイス・カッソンの影響であったと述べている。[16] 女優たち自身も、フェビアン社会主義との関わりがなかったわけではないようである。エレン・テリーとショーは幾度も手紙をやりとりし、それが書簡集という形で出版されていることからも親しい友人であったことが推測できる。[17] また、レーナ・アッシュウェルは、ショーからフェビアン協会の集会での「女性の職業としての舞台」という講演の依頼をうけたことがあった。[18] 少なくとも有名女優たちは、何らかの形でショーら新しい演劇を求める人々と関わりがあったのだろう。

同じくAFLのメンバーであったはずのドイツ生まれの女優キティ・マリオンの自伝からは、ショーらと交流があった様子は読み取れない。[19] おそらく、それは、キティ・マリオンがミュージック・ホールを中心に活躍する女優であり、イレーヌ・ヴァンブルーやレーナ・アッシュウェルといった当時の有名女優とは活躍する場が異なっていたためだと思われる。AFL の発足当時、無名の女優であったジェーン・コンフォートは、「この商売に関わるほとんど

全ての女優が加わるほど同盟は成長し続けた」と強調しているが[20]、AFL のメンバーのなかでも副会長や執行委員として名を連ねる有名女優たちの上層部とキティ・マリオンのような無名女優の状況は異なると推測できる。

このようにして、AFL は新しい演劇を求める人々の助けを借りていた。AFL は、「全ての組織を援助すること」によって、演劇の教育的効果を十分に発揮させたといえる。穏健派、戦闘派の組織に関わらず、協力をしたことは、AFL の特徴のひとつであったといえるだろう。これは、計らずも穏健派と戦闘派に分裂しているようにみえる女性参政権運動に視覚的な一体性を与えることになった。

３．ＡＦＬの芝居

AFL は年に一度のウェストエンドの劇場公演の他に、WSPU、NUWSS、WFL 等から依頼を受け、それらの組織の集会や催し物に芝居を提供した。穏健派と戦闘派のバザーや集会で、全てがというわけではないが、同じ芝居をし、同じ女優たちがその舞台に立っていた。観客は穏健派の集会であれ、戦闘派の催し物であれ、同じ娯楽に触れることができたのではないか。

AFL の年一回の公演の場合、観客は穏健派、戦闘派などの組織の違いを超えて劇場を訪れたであろう。「全ての組織を援助すること」を目的としていた AFL だからこそ、女性参政権活動家たちは、ここでは団結することができた。『タイムズ』紙も劇場のなかの「熱狂的な支持」の様子を伝えている。[21] この年一回のウェストエンドの劇場公演では、一幕ものの演劇とパジェントを組み合わせることによって、一幕芝居では現実の女性を取り上げ、パジェントでは理想化された女性表象を取り上げた。一幕芝居は、同時代の中流階級または労働者階級女性の問題を描写することによって、女性参政権運動の擁護をするため、視覚的にはどうしても華やかさに欠けた。それを補ったのがパジェントであったが、パジェントでは、多数の美しい女優たちを登場させ、1909 年のスカラ劇場で上演された『有名な女性たちの仮装』では、ジャンヌ・ダルクやナイチンゲール、ジェーン・オースティンといった歴史上の女性た

ちを登場させたように、女性参政権には否定的な大衆にも受け入れられやすい保守的な表象を使用していた。このように、AFLの表象戦略は、大衆を楽しませ、女性参政権運動のプロパガンダを目的とし、ラディカルな女性表象と保守的な女性表象をバランスよく提示しようと意図していたことがうかがえる。[22]

では、ウェストエンドの劇場公演ではなく、NUWSS、WSPUやWFL等の組織に依頼されて芝居を提供する場合はどうだったのか。ホーリッジは、AFLは穏健派と戦闘派の組織に依頼された場合、各組織が求めるものに合わせて演目を決めていたことを指摘している。WSPUに依頼された場合は、「ミリタンシー」を正当化する演目を、また依頼者がNUWSSであった場合、NUWSSは、選挙権が「男性に与えられている、または与えられたと同じ条件」で与えられることを求めていたため、それに合致する演目を選択していたという。[23] ホーリッジの指摘どおり、『行動で、言葉ではなく』という芝居など、WSPUの支部の依頼では上演されてもNUWSSの依頼では演じられないものもあったが、共通して人気のあった演目もあった。

表1は、1909年6月から1910年6月までの年次報告書、表2は1911年1月から6月の半年間のAFLの演劇部の報告書、表3は1913年6月から1914年6月の演劇部の年次報告書から依頼された演目とその上演回数をまとめたものである。[24] 表1と3によると、1909年から1910年に上演されていた演目と1913年から1914年に上演されていた演目がだいぶ異なることがみてとれる。しかしながら、そのなかでもシシリー・ハミルトンとクリストファー・セントジョンによって書かれた『選挙権がどのように勝ち取られたか』が最も多く上演されている。

この『選挙権がどのように勝ち取られたか』は、下層中流階級の事務員、ホーラス・コールの家庭が舞台である。ホーラス・コールは、女性は家庭にいて夫に養ってもらうべきという信念の持ち主であった。あるとき、女性参政権組織が、女性が男性に養ってもらうというのなら、そうしてもらいましょうということで、夫や兄弟のいない女性たちが最も近い親戚の男性のもと

に女性たちを集めるという働く女性のストライキを慣行する。それによって、コール家では、女性の使用人が仕事をやめ、彼の妹、姪、遠い親戚、彼の叔母、そして従姉妹が彼を頼って家に集まってくる。そんな多くの親戚女性たちを養えないホーラスは、見事に女性参政権賛成派に変身をとげる：「君たちは正義がなされるために―君たちみんな―僕に頼ってくれていい。何かを成し遂げたいのなら、男たちにやらせればいい！選挙権を女性に！」。[25]

この『選挙権がどのように勝ち取られたか』は、1909 年４月 15 日から開催された WFL の「緑・白・黄金祭」[26]、同じく 1909 年５月 13 日から 26 日の WSPU によるプリンスズ・スケーティング・リンクで開催された「女性たちの展覧会」でも[27]、そして同じく 1909 年に NUWSS のセヴンオークス支部の依頼やロンドン女性参政権協会の依頼によって、この芝居は演じられた。このように同じ年、戦闘派からも穏健派からもこの芝居は人気があった。

この芝居の人気の理由はどこにあったのだろうか。この芝居には、戦闘派の女性参政権組織に対するささやかな批判がないわけではない。ホーラスの妻エセルのセリフの中に、「政府を脅かして選挙権を与えるようにさせることは決してできないとホーラスは言っているわ。割れた窓ガラスは全て女性参政権という棺桶に打ち付ける釘だと彼は言っている。それは本当よ。イギリス人男性をおどすことはできないの」とある。しかし、実は戦闘派に対する批判はこの箇所くらいであり、大したものではない。おそらくサフラジェットであるエセルの姉妹ウィニフレッドも登場するが、彼女も強烈なキャラクターではない。ホーラスが多数の親戚女性たちに押しかけられててんてこ舞いしている様子がコメディになっており、この作品の魅力なのであろう。穏健派にも戦闘派にも受け入れられるバランスのとれた作品なのである。ホーリッジは、AFL は「エドワード朝の社会における一般化された性的不均衡」に注目し、運動のなかの特定の組織に肩入れするようなことはなかったと指摘しているが[28]、バザーやフェアのようにどのような観客が来場するのかわからない機会に上演するには最適の演目であった。

『選挙権がどのように勝ち取られたか』のように WSPU、NUWSS、WFL の

戦闘派、穏健派を問わず上演された芝居は、他にもあった。1911 年に、『選挙権がどのように勝ち取られたか』と同じくらい人気のあった『イングランド女性の家庭』は、女性と男性の仕事が分離されている問題を取り上げている。この芝居は、1911 年３月 30 日にイーストエンドにあったボウ・バス・ホールで労働者階級女性たちを相手に無料で上演されている。[29] ウェストエンドでの集会に集まってくる中流階級女性だけでなく、労働者階級女性にも受け入れられると考えられたのだろう。

このように、参政権組織を問わず、同じ芝居をすることができたのは、女性参政権運動として大衆にむけて一定のプロパガンダを提示できたということになる。しかし、そのプロパガンダは、決してラディカルなものではなかった。

４．イーストエンドでの活動

AFL の組織としての強みは、ひとつには、女優という職業の機動性にあった。女優たちは、自らの職業の都合上、地方とロンドンを行き来することが多かった。1911 年から 1912 年の年次報告には、メンバーがロンドンを去る前にツアーリストを送ってくれれば、地方支部の責任者と連絡をとることができ、それが地方支部の活動拡大のためになるとある。[30] 女優たちは、地方でも地方の参政権組織に協力したことがうかがえる。

参政権組織を問わずに協力するという姿勢の AFL であったが、次第にその姿勢を貫くことが難しくなってきた様子がイレーヌ・ヴァンブルーの自伝からうかがえる。エドワード朝期の人気女優のひとり、イレーヌ・ヴァンブルーは「私は、我々の同盟は非戦闘派の側で戦いますとセクレタリーに保証されて会員になることを了承しました」ということで AFL に加わり、副会長のひとりとなった。[31] そして、1913 年のドルリーレーン劇場での大集会にスピーカーのとして登場した。この日、劇場は人であふれていた。ヴァンブルーは会場の様子を次のように伝えている。

集会はおおよそ静かに始まりました。しかし、私が仰天

> したことに、戦闘派寄りの二人のスピーカーが、私が思うところ、どんな形の攻撃も容認する人々からなった観客からとてつもない熱狂とどなり声を掻き立てました。私が話す順番がくると私には必ず反対意見がくるとわかっていましたが、私は自分の立場をはっきりとさせることを心に決めていました。また、私と同様に間違った主張のもとにやってきた来賓たちのためにも道義上そうしなければならないと思ったのです…。[32]

ヴァンブルーが舞台上で自分は戦闘的行為に賛成しないことを明らかにするや否や「何で彼女は来たの？」という声が客席から聞かれた。レーナ・アシュウェルがヴァンブルーの後に続き、AFL としては WSPU に協力することをやめないことを明確にした。[33] この出来事により、イレーヌ・ヴァンブルーは、AFL を去ることになった。彼女の自伝によると、WSPU に協力することを批判する人々から別組織をつくり、その会長となってほしいという依頼があったそうである。[34] このことから、AFL の内部にも戦闘的組織である WSPU に協力することに批判的であったものたちがそれなりに数多くいたことがうかがえる。

WSPU の戦闘的行為がエスカレートしていく中で、『選挙権がどのように勝ち取られたか』のようなラディカルではないプロパガンダは現実とそぐわなくなっていったのではないか。表１、２、３にみられるように 1913 年から 1914 年の演目とそれ以前を比べると演目が異なるのは、こうした理由があったのではないかと推測できる。そして、それゆえに、AFL は自らの活動の方向性をかえていったのではないか。

AFL は、1910 年くらいからイーストエンドの労働者階級女性を教化しようと試みていた。[35] そして上述したように 1910 年３月 30 日には、ボウ・バス・ホールで無料の上演をし、1912 年 11 月 10 日、1913 年５月 25 日には、ロンドンの東にあるヴィクトリア・パークで行われた大集会にそれぞれ代表団を送っている。

イーストエンドの活動に力を入れ始めた1913年から1914年にかけて、人気のあったのは『チッキー夫人とのおしゃべり』という対話劇である。『チッキー夫人とのおしゃべり』は、チッキー夫人という未亡人の労働者階級女性を主人公としている。掃除婦チッキー夫人と雇い主の妹で反女性参政権のホルブルック夫人との会話からなる芝居である。ホルブルック夫人は、反女性参政権の請願書のための署名を集めており、チッキー夫人の署名を求める。チッキー夫人は、ホルブルック夫人との会話のなかで労働者階級女性の苦しい現状を明らかにし、反参政権を正しいとするホルブルック夫人の議論を論破していく。[36]

この芝居が1913年6月から1914年6月にかけてこの芝居が多く上演されたのは、AFLの教化の対象に、労働者階級女性も加わるようになっていたということだ。1913年から1914年の演劇部の年次報告書には、この年、47の余興をNUWSS、イプスウィッチ女性参政権協会、女性事務員とセクレタリー協会、WSPU、ロンドン女性参政権協会、イースト・ロンドン連盟、アイリッシュ・リーグ、保守統一女性参政権協会に提供したとある。[37] 1909年のWSPUの「女性の展覧会」やWFLの「緑・白・黄金祭」などのようなロンドンの大きな会場を借りてのバザーは、おそらく1914年4月11日から30日にNUWSSによって開催された「女性の王国」展覧会以後開かれてはいないようである。ここでもAFLは演目を提供したが、その演目は、AFLの活動初期に提供していたものとは異なっている。バーナード・ショーの『プレス・カッティングス』やイプセンの『人形の家』の一部、フランスの劇作家ウジェーヌ・ブリューの『独り身の女性』の一部など、より演技の質の高さが求められる演目を選択している。[38] ここには、1913年にコロネット劇場でアイネス・ベンスーザンが試みた監督も演出もすべて女性で行うという「女性劇場」のような、より演劇の専門性を追求する傾向がみられる。AFLが活動始めた1909年ごろには、戦闘派、穏健派を問わず、『選挙権がどのように勝ち取られたか』のようなラディカルではないプロパガンダを提供する余地があったが、女性WSPUの戦闘的行為がエスカレートし、女性参政権運動を取り囲む

状況が変化しはじめると、『選挙権がどのように勝ち取られたか』のなかに描かれるようなサフラジェットと実体がそぐわなくなってきた。AFL の方針の変化とこうした運動の状況の変化によって、AFL の統一的な女性参政権運動のプロパガンダを提供する役割も減じていったと考えられる。

５．終わりに

以上のように、AFL は、女性参政権運動の広報活動において重要な役目を担っていた。しかし、第一次世界大戦の勃発が AFL の活動を狭めることになっていく。1916 年の年次報告書には、次のような記述がある。

> 参政権の問題に関する芝居、またはその問題に関するプロパガンダ余興の需要がなくなってしまったという単純で自然な理由によって、前回の年次報告が会員の皆さんに提出されてから演劇部の定期的な活動は要請されなくなってしまいました。[39]

こうして、参政権組織に演劇を提供することはなくなったが、1914 年 11 月には、AFL の支部のひとつが、慰問団をつくり、一週間に 6 から 8 のコンサートを行った。野営地だけでなく、病院なども訪れ、無料コンサートも開催した。こうした活動について、AFL は、二つの点を強調すべきであると述べる。ひとつは、「こうした仕事がもつ未来に対する可能性」であると慰問等の仕事が戦後の AFL の発展にもつながっていくであろうと予測を述べる。二点目としては、娯楽を提供するおり、「人気を得るためには、観客を明らかに軽くみたものを含む必要がある――安っぽい人気のある歌やメロディーの叫ぶようなコーラスは、アーティストたちの成功の試金石であった」とあり、コンサートをする際には、観客の要求にこたえるものを提供していた AFL の姿勢がうかがえる。[40] たとえ、観客の趣味が安っぽい音楽から古典的なものに変化したとしても、観客の要求に応えることが、女性参政権運動の広報を担った AFL の姿勢だったのである。AFL は、数多くの組織が存在した女性参政権運動において、戦闘派と穏健派の組織によって依頼された集会等で、人々

が楽しめる、人々に受け入れられる演目を提供しようと試み、それが戦闘派、穏健派を問わず、ある一定の広報活動を展開することへとつながっていた。

表1 1909年6月～1910年6月のAFLによる演目と上演回数
（*The Secretary's Report*, June 1909-June 1910より。）

演目名	上演回数
A Pageant for Great Women	2
The Outcast	1
Pot and the Kettle	7
Before Sunrise	3
How the Vote was Won	14
A Woman's Influence	2
The Master	1
A Junction	2
Perfect Ladies	1
Enery Brown	1
Press Cuttings	2
At the Gates	2
A Change of Tenant	4
Deeds, not Words	2
The Apple	2
Pied Piper Hemlin	1
An Englishwoman's Home	2
Ms Cicely Hamilton's Waxwork	3
Unexpected Circumstances	1
A Matter of Moment	1

表2　1911 年 1 月から 6 月の AFL による演目と上演回数
（*The Half Yearly Report of Play Department*, *January to June 1911* より）

演目	上演回数
How the Vote was Won	7
The Junction	2
The Woman Wins	1
An Englishwoman's Home	7
The Apple	2
Change of Tenant	3
The Maid and the Magistrate	6
The Twelve Pound Look	1
Restitution	1
Her Wild Oats	2
An Allegory	1
The Eclectics Club	1
Trimmings	1
A Woman's Influence	1

表 3　1913 年 6 月から 1914 年 6 月の AFL による演目と上演回数
（*The Secretary's Report of the Play Department*, *June 1913 to June 30th 1914* より。）

演目	上演回数
The Iron Law	2
Two of the Odd boys	1
Ten shillings	1
Mr Wilkinson's Widow	1
A Chat with Mrs Chicky	7

Kindly Flames	2
Maid and the Magistrate	1
Overheard at ***	1
Miss Appleyard's Awakening	1
How the Vote was Won	4
The Better Half	1
An Englishwoman's Home	1
Which?	2
The Suffragette	1
Press Cuttings	1
The Twelve Pound Look	1
Restitution	1

（＊＊＊は史料からは読み取れなかった。）

本研究は、麗澤大学より特別研究費（2009 年）を受けて行われた。

（注）

[1] 保守党系の女性参政権組織として、保守統一女性参政権同盟（Conservative and Unionist Women's Franchise League）、自由党系の女性参政権組織として自由女性参政権同盟（Liberal Women's Suffrage Union）、また英国国教会を信仰する女性たちによる女性参政権教会連盟（Church League for Women's Suffrage）、ユダヤ人女性たちの女性参政権ユダヤ人連盟（Jewish League for Woman Suffrage）などがあった。

[2] AFL の先行研究に関しては、山本博子「イギリス女性参政権運動と演劇―『女優参政権同盟』（Actresses' Franchise League）の結成と活動―」、『國學院大學栃木短期大學紀要』（第 42 号、2007）、pp. 1-4 に詳しい。Julia Holledge, *Innocent Flowers-Women in the Edwardian Theatre*, (London: Virago, 1981); Shiela Stowell, *A Stage of Their Own: Feminist playwrights of the suffrage era*

(Michigan: University of Michigan Press, 1992); Viv Gardner and Susan Rutherford, *The New Woman and Her Sisters-Feminism and Theatre 1850-1914*, (London: Harvester Wheatsheaf, 1992); Susan Carlson and Kerry Powell, "Reimagining the theatre: women playwrights of the Victorian and Edwardian period", pp.237-256 in Kerry Powell, ed., *The Cambridge Companion to Victorian and Edwardian Theatre*, (Cambridge: Cambridge University Press, 2004); Katherine Cockin, *Women and Theatre in the Age of Suffrage: The Pioneer Players, 1911-1925* (London: Palgrave, 2001)など。

[3] 山本博子、同上。

[4] A. J. R., ed., *The Suffrage Annual and Women's Who's Who*, (London: Stanley Paul, 1913) p.11.

[5] Actresses' Franchise League, *The Secretary's Report of the Play Department, June 1913-June 1914*, p.12 in Women's Library, 2AFL/A3/2.

[6] Raphael Samuel, Ewan MacColl, and Stuart Cosgrove, *Theatres of the Left 1880-1935－Workers's Theatre Movements in Britain and America*, (London: Routledge and Kegan Paul, 1985), p.xvii-xviii.

[7] ウード・クルターマン、『芸術論の歴史』、神林恒道、太田喬夫訳、（勁草書房、1993 年）pp.160-161.

[8] フェビアン協会は、イギリスの社会主義団体のひとつであった。

[9] ジョージ・バーナード・ショーの妻が AFL のパトロンとして名を連ねている。また、AFL が上演した『プレス・カッティングス』はショーによるものであった。

[10] George Bernard Shaw, *The Quintessence of Ibsenism*, (New York: Dover Publications, Inc., 1994[1904]), p.67.

[11] Anthony Oldpate, "Art and Propaganda", *The New Age*, 18 Jul 1908, p.238.

[12] Anthony Oldpate, "Art and Propaganda", *The New Age*, 15 Aug 1908, p.319.

[13] Edward Fordam Spence, *Our Stage and Its Critics* (La Vergne: Bibliobazaar, 2010 [1910]), p.110. AFL が上演したものだけでなく、女性の問題を扱った芝居はあった。特にエレン・テリーの娘、イーディス・クレイグが 1911 年に立ちあげた劇団パイオニア・プレイヤーズは積極的に女性問題を扱った芝

居を上演した。詳しくは、Katherine Cockin, *Women and Theatre in the Age of Suffrage-The Pioneer Players, 1911-1925*, (London: Palgrave, 2001)を参照のこと。

[14] Cary M. Mazer, "New Theatres for a New Drama" in Kerry Powell, ed., *The Cambridge Companion to Victorian and Edwardian Theatre*, (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), p.208.

[15] Actresses' Franchise League, *The Secretary's Report*, June 1909-June 1910,p.2 in Women's Library, 2/AFL/1a.

[16] Sybil Thorndike, Interview tape in "Oral Evidence on the Suffragette and Suffragist Movements, The Brian Harrison Interviews, 1974-1981," Women's Library, 8SUF/B/063.

[17] Christopher St. John, ed., *Ellen Terry & Bernard Shaw: A Correspondence*, (London: G. P. Putnam's Sons., 1932).

[18] Lena Ashwell, *Myself a Player*, (London: Michael Joseph Ltd., 1936), p.184.

[19] Papers of Kitty Marion in Women's Library, 7KMA.

[20] Jane Comfort, Interview recorded by Julie Holledge, 1977 in Julie Holledge, *Innocent Flowers*, p.50.

[21] "Scala Theatre", *The Times*, 13 Nov 1909, p.12.

[22] Mayuka Sato, "Performance and Politics: Actresses' Franchise League and the suffrage movement in Britain", Papers read at the 19th Annual Conference of the Women's History Network, 10 September 2010, University of Warrick.

[23] Julie Holledge, *Innocent Flowers*, p.64.

[24] 1910 年以後の年次報告書には、上演リストが掲載されておらず、また演劇部の年次報告も 1911 年の 1 月から 6 月までのものと、1913 年 6 月から 1914 年 6 月のものしかウィメンズ・ライブラリーには存在しない。

[25] Dale Spender, Carole Hayman, eds., *How the Vote was Won and Other Suffragette Plays*, (London: A Methuen Theatrefile,1985), p.26.

[26] Maude Arncliffe Sennett Collection, Volume 7, British Library, Mic.C.13137

[27] "Programme of Women's Exhibition" in The Papers of Mary E. Gawthorpe, 1881-1973, The Tamiment Libraray and the Robert F. Wagner Labour Archives at

New York University, Microfilm, Series 3, Box 3.この期間に 18 の異なった演目が AFL によって上演された。

[28] Julie Holledge, *Innocent Flowers*, p.65.

[29] Actresses' Franchise League, *The Half Yearly Report of Play Department, January to June 1911*, p.2 in Women's Library, 2/AFL/A2/1.

[30] Actresses' Franchise League, *The Secretary's Report of the Actresses' Franchise League, June 1911-June 1912*, p.4 in Women's Library, 2/AFL/A3/1.

[31] Irene Vanbrugh, *To Tell My Story*,(London: Hutchinson, 1948), p.83.

[32] 同上書、pp.83-84.

[33] 同上書、pp.83-84.

[34] 同上書、pp.83-84.

[35] Actresses' Franchise League, *The Secretary Report of the Actresses' Franchise League, June 1910-June 1911*, p.5 in Women's Library, 2/AFL/A/1b.

[36] Evelyn Glover, *A Chat with Mrs. Chicky* in Dale Spender, Carole Hayman, eds., *How the Vote was Won and Other Suffragette Plays*, pp.104-113.

[37] Actresses' Franchise League, *The Secretary's Report of the Play Department, June 1913 to June 30th 1914*, p.12 in Women's Library, London, 2/AFL/A3/2.

[38] "Brochure of Women's Kingdom", p.17 in Women's Suffrage Collection from Manchester Central Library, Adam Matthews Publications, Microfilm, M50/2/13/10.

[39] Actresses' Franchise League, *The Annual Report of the Play Department of the AFL*, October 20th 1916, p.1 in Women's Library, 2/AFL/A2/2.

[40] Actresses' Franchise League, *The Annual Report of the Play Department of the AFL*, October 20th 1916, pp.1-2 in Women's Library, 2/AFL/A2/2.